073　蝶が岳Ⅰ　030823

◎7 月 30 日、大阪を 7 時に出発、相澤・前川・番匠・岡村の四人で上高地に向かっています。オレの目的は蝶ヶ岳に登りたい。今回は山はオレひとりかな、他の方がいっしょに登り途中で棄権なら引き返さなければいけないと思っていた。オレ自身、体力がどこまでもつか、蝶ヶ岳から先の常念岳に向かってすぐに左に折れ横尾まで反時計回りに一周を歩けるか、「ま　なんとかなるでしょう」と思いながらも高速道路を走っております。

◎50 歳代のころ、5 月の GW には上高地に何度も行った。当時まだ自家用車が今のバスターミナルまで入ることができた。ほとんど寝ずに夜中に車を走らせ登山装備に着替えた。その日の明るいうちに槍ヶ岳の肩の小屋までたどり着き、小屋で泊まった。雪の雪渓をフーフー言いながら登ったのが懐かしい。調べると、バスターミナルから槍ヶ岳までのコースタイムが 10 時間半である、おそらく 8.9 時間で登っていたんだろう。

◎昼過ぎにアカンダナ駐車場にやってきた、そこで山の装備に着替え、重い荷を背負ってバス乗り場へ、次のバスは 30 分後なので往復切符を買いゆっくりしていた。並んでいる人たちは半分ぐらいが若い外国人、登山者は何組かしかいない。ネパール人の美男美女の若者、日本語がペラペラの方やらちんぷんかんぷんの方やら、少し話したが学生のようで楽しそうである。ほかに、なに人かはわからないが、若者たちは屈託がない。

◎2：30 荷を背負って歩き出した、有名観光地のここは、人、ひとがいっぱい、老いも若きもいろんな人種も右往左往と楽しんでいる。オレも 7.8 年ぶりか、歩くうちに思い出され、以前泊まったところだ、ここで雪中テント泊をしたと思い出され、水の流れ、大きな石コロ、穂高連峰の山々と流れていく。40 リッターのザックにシラフとテント、ボンベ・コンロ・コッヘル、水に着替え、ポシェットにはカメラと雑品、最近はこれで 2 時間ぐらいなら大丈夫、3 回ほど休憩をして徳沢に着いた。

◎涼しい、半そでシャツに荷を背負って歩いたがちょうどいい、止まって休憩するとシャツがもう一枚欲しいという涼しさである。大阪では、日々35 度を超え、我がアトリエも換気扇に扇風機、暖かい風が流れるだけ。

◎テント場には 20.30 とテントが張られている。トイレに近いほうがいいというところを探して張った。テント場代金は一人 1500 円也。5 時をまわり穂高方面の山に陽が沈み夜の雰囲気になってくる。

◎ここはかつて牧場で牛馬が放たれていたらしい。汚い小屋が二つ並びその横を足早に通過して横尾を過ぎ槍に向かっていたのはもう 20 年前の話しかな。10 年前にはここでテントを張って、蝶を反時計回りに歩いたことがある、ちょうど着いた日に晩飯が終わって一杯飲んでいた時に地面が揺れた。新潟方面のかなり大きな地震だと記憶しているが、雪のない季節だった。

◎ビール一本を飲み、鍋をつつき、ウイスキーをちょっと舐め、8 時頃には寝た。

◎翌朝、5：10 ひとりで登り始める。昨夜のうちに登山口を見つけていた、番匠さんが、「それでは気をつけて　がんばって」とおいしそうな菓子をくれスマホでパチリ、手を振っている。コースタイムでは長塀山（ながかべ）まで 220 分となっている。10 年前は澤山さん・河瀬さん・オレの 3 人でわいわい勢いよく登ったのでどんなコースだったか記憶がないが、20 年前には、和田さんと、「ちょっとそこまで」と登りきる予定もなく上がって、そのだらだらさに嫌気がさして途中から引き返した、そのだらだらさを覚えている。

◎「ジジイだ　30 分に一本でいこう　休憩は 3 分ぐらいで」歩きながら体調がいい、気分よく歩ける、30 分がすぐに来る。食料が心配だが、蝶の小屋まで行けば何か喰えるだろう。休憩の都度、パンを、小さいおにぎりをほおばった。朝飯を喰わずに登り始めたが、その都度の行動食が美味い。樹林帯が続く背の高い針葉樹が茂っている。その向こうに穂高連峰が朝日を受けキラリ光っているのが隙間からちょろりと見える、空も青いが同じようにちょろりとしか見えない。

◎1 時間登ってきたがまだまだ樹林帯の中、梓川の流れる音が聞こえる。鳥の声も聞こえる。帰途、双眼鏡をもった探鳥の方に、「今の声は・」「こまどり」と教えていただいた、いい声だが姿は見えない。

◎ケタイなキノコ、ラッパ状の形、色は濃いオレンジ色、はじめて見た。（キツネタケ？）

◎3 時間足らず登ったがまだまだ樹林帯、へ～へ～である。池があった、「妖精の池」かと思ったが、地図を見るとその池はてっぺんの手前にある。池は妖精の池を含め三つあった。

074　蝶が岳Ⅱ　040823

◎3 時間ほど登った時点で長塀山の標識がある、三角点もある、少し樹も低くなってきたような気もするがまだまだ樹林帯のままだ。空は白いまだらな雲が出始めた、天候がもってくれるといいが、小屋でラーメンが当たればいいが・・。朝食無しでも、ちょくちょく食べれば、元気度は同じだねえ。

◎長塀山を過ぎちょっと下りまた池がある。ニッコウキスゲかな。紫の花、黄色い花、白い花、この季節、山は花の季節だ、お花畑だ。5 時間過ぎたあたりで視界が開けポコリンの尾根道が見えだし、蝶の小屋も見える。つくづく思うに、5 時間も樹林帯の中を歩かされるこのルートは皆さんにお勧めできないね。

◎10：30 てっぺんにやってきた。三股から登ってきた方も、「樹林帯がそこまであったよ」とおっしゃっていた。「前は見えんし　景色は見えんし　空は見えんし　おもろない・・」とぼやきがでる。なんだかガスが出てきた、たちまち目の前の小屋が見えなくなり、穂高連峰が見えなくなり、涼しくなってきた。

◎小屋に行くと、カレー・ラーメン・おでんのメニュー、11 時からだというので待つことにした。松本側はガスがかかりまったく見えない、穂高方面は見える。続々人が来る、小屋のオヤジと間違われ「オレが小屋の経営者に見えるか・・」と聞こえぬようにぼやいてみた。長らく待たされ出てきたラーメンを外のベンチですすった。味が薄い不味いとこれまた心の中でぼやき、千円もするのだからと最後まで飲み干した。

◎今日は体力がなかったら引き返そうと考えていたが、てっぺん付近に近づきまだまだ体力が残っている、これなら最初の予定通り反時計回りにまわって横尾から帰ろうと決めた。常念に向かって 30 分ほどで左折だ。

◎12 時に下り始めた。ジグザグにどんどん下っていく。登りと同様 30 分ピッチで休みをとった。2 時間ほど下ったところでベンチがあり、樹林が途切れ穂高方面がよく見える、「槍見台かな」と調べたがまだその一つ上あたりだ。地図とスマホの二本立てだがこれは便利である。スマホは現在地がわかる、地図だけだとここが槍見台と思ってしまうところだった。このあたりからなんだか疲れてきた、「たいあーど」さすがにばててきて体力がなくなってきた。下りは危険、慎重に、ゆっくり、事故なく帰らねば。あとから知ったことだが朝の 8 時頃、オレが長塀山に着く少し前に、目の前の穂高で 66 歳の人が滑落死したらしい。歩荷（歩荷：荷を山頂に運ぶ）のヘリだと思っていたが、遭難死亡事故だったんだ。

◎4 時前に横尾に下りてきた。最後の一本ぐらいがバテバテだった、60 分で歩くところを倍ぐらいかかったかもしれない、それでも焦ってはいけない、ゆっくりでいいから確実に降りないと、一歩踏み外すと怪我ではすまない。さあこれから徳沢まで 1 時間ちょっと、まだ遠いが林道なので事故はない安全な道だ。たくさんの人がやってくる、横尾泊りか、涸沢・槍方面に登るのかな。あらためて思うが、よくまあがんばって登りました、尾根道はすごかった、蝶ヶ岳に感激である。

◎5 時に徳沢に着いた。同道の仲間がベンチに座って手を振ってくれている、心配をかけまして無事帰ってまいりました。「ビール？　ソフトクリーム？」ソフトクリームをいただきました。今回“”ひるがの SA“でもソフトをいただいたが、徳沢のものの方が一枚上だね、美味い。

◎晩飯は、まずはビールをいただきウイスキーをちびりちびり、カレーライスをいただき暗くなってきたのでテントに入った。朝は 6 時半ごろ起床、テントをたたみパッキング、出発は 8 時半になった。三日間ほとんど雨に降られることもなくラッキーな日々でした。バスターミナルまでの 2 時間、相変わらず人々がやってくる。

◎テント場にぎゅうぎゅう詰めたら 10 人は寝られるかなというテントが 4 張、「大阪府立高津高校」と書かれていた。「おお　コーヅ　か」「は～い　高津高校です」嬉しいねえ、この季節、高校生の合宿風景によく出逢う。

◎アカンダナ駐車場まで帰りすぐそばの、「前に行ったメシ屋　イワナの塩焼きが喰える　風呂まであった？」行ってみると温泉の源泉、石鹸も何もない熱い風呂にひとつかり、飯は運転を控えているので“ざるそば”だけにした、これもまずかった。茨木で中華そばを食べ、帰り着いたのが 7 時頃である。

◎バスの中から“ト伝の湯”が見えたが汚い建物の扉が板でくぎ付けされていた、山下さんと入った風呂が懐かしい。釜トンネルも今風の普通のトンネル、ぼろトンネル時代、ピッケルとアイゼンで凍ったトンネルを歩いたものだ。徳沢の小屋も昔のぼろ小屋のイメージはなく、今風のお洒落な山小屋になっていた。

075　淀川花火　070823

◎5月ころに、「かるたを造るが　その絵　描いてもらえない」谷さんから依頼を受けた。六稜同窓会（北野高校）150周年のイベントの一つとして、かるたを造る話がありその絵の依頼が来た。よしヤロウと返事をしたが海のものとも山のものともイメージがわかなかった。かるたとは“いろは”47文字というが今回は何枚になるのかな。まだ句の投稿を見守っている状態で、大半は決まりつつあるがまだ全部ということではなさそうだ。

◎半月ほど前の初めての会合で、大阪中津にあるTラボで50歳代のTさんと60歳代のHさんと3人で話し合った。句の中で、“天才、秀才、凡才”という文字がある。「これはどう表現しようかな」「顔を3個並べたら」乱暴な意見だけれどなるほどと思った。顔を3個並べた絵を描きメールで送ると、「どれがどれ？多分この凛々しいのが・・」もうひとりも、「こっちがこれで・・」と返事が来た。お二人とも優秀な秀才なれど何ごとも理解したい脳をお持ちかなと苦笑した。

◎次回は8月5日にここで打ち合わせしましょう、当日は花火があるので終わってからちょっと屋上で花火を見ましょう、と決まった。

◎一か月ほど前にカメラを落とした。ゴツン、あいた～、えらいことをしてしまったと思い持ち帰ったら、電池の蓋が外れただけですぐに直った。何度か試写をしたが事なきを得たと胸撫でおろしていた。D7000という一眼レフカメラ、10年前ぐらいに中古で買った。その後、そのカメラは毎日のように使っている、ちょっと絵の撮影、資料の撮影、山には必ず持っていく。アトリエで使う分にはいいのだが、ポシェットに入れ一日中持ち歩く、テントの中で一緒に寝る、山ではカメラもストレスがかかるはず。テントは山の中では雨風を防いでくれていいのだが、家に持ち帰ると山の湿気はすごいようで、何もかもがズックり濡れている。カメラも同じように湿気にさらされているのだろう。それでも持ちこたえて10年経ったが、先日のゴツンがこたえたのか、レンズが外れなくなった。

◎カメラ：アトリエでは40mmマクロを着け、絵や小さい資料を撮影している。2万円の安いレンズながら絵を写すにはこのレンズがいい。山や野外は10～24mm広角レンズを使っている。故中西さんが、「10mmばっかで　撮りやあ」と教えてくれた。お気に入りのレンズ、これも中古で6万円ぐらいで買った。

◎レンズが外れなくなり、近所のカメラやに行くと、「わからない　大きい店に行ってください」ということで、かるたの打ち合わせのついでに梅田のキタムラカメラに行った。ベテランそうなおっさん何度か試みて、「むむむ　外れませんね　これはうちでは」「え　カメラもレンズも　ダメなの」「何とも言えないが　共に　ダメかも」すごすごと帰った。ええいもう一軒、以前行ったことがある八百屋を探した。「このあたりだったはずだが・・」とあきらめかけエスカレータの列に並んでいる右側に、八百の看板が目に入った。列を離れ店に入った。「むむむ　かたい　なんで取れん」ここも、ベテランそうなおっさん何度も試みて、小ケースの中の同製品を見ては、ねじり、また見てはおさえ10分以上たったところでポロリとレンズが外れた。「ここのトメが　バカになってる」「今レンズを入れたら　また　外れないよ」「お代はいらないよ」オレは感謝感謝で店を出て、中津の方に歩き出した。カメラは持ち帰った翌日、バカになったトメをヤスリで削りレンズをはめ撮影している。着脱も可能だけれど、持ち歩くのは不安だね、山には無理かもね、次のものを買わなくっちゃ、ネットで13万円で売っている、中古だと8万円だ。

◎花火を見ようという人の流れ、まだ4時だというのに弁当や飲み物をもって歩いている。Tラボは淀川左岸に近いので、花火見物の方がたと同じ流れで歩いている。極暑のこの頃、梅田に行く電車の中、梅田のビル街は冷房が効いて涼しいが、ラボまでのヒナタ道は熱い。

◎ラボで、T&Hお二人さんとかるたの打ち合わせ、オレの持参した下図を見せあれやこれや、資料はこれですとコピーをいただき話は弾む。最初は“海のものとも山のものとも”状態だったが2回目の打ち合わせで道筋が見えだした。

◎13階建ての細いビルの屋上に上がると、淀川がまる見えである。花火は淀川の真ん中に設置された船から打ち上げられる。すぐに帰るつもりだったが、素晴らしい花火の1時間、どか～ん、ひゅるる、ひか～り。

076　今昔物語集　　110823
◎今昔物語集の中に、狐の話がいくつか出てくるので紹介します。

◎38：狐変女形値幡磨安高語第三十八：きつねをむなのかたちにへんじてはりまのやすたかにあふこと
◎近衛舎人（舎人；貴人の儀仗兵）である播磨の安高が月明かりの秋の夜、宴の松原（内裏の西の空き地）で顔を扇で隠した絶世の美女に出会い、これぞ高名な豊楽院の妖狐化と怪しみ、追剝を装って刀で脅しにかかると、美女は悪臭強い小便をひっかけ、たじろぐすきに狐に早変わりして遁走し、二度と姿を現さないという話。
◎その後安高は、夜中と言わず、夜明けと言わず、何度も内野通りに出かけたが、狐はすっかり懲りたのか、まったくで会うことが無かった。狐は美しい女に化けて安高を〇〇そうとしたしたがために、危うく殺されるところであった。されば人は、人里離れた野原などに一人でいるときは、きれいな女など現れても、うっかり好きな心など起こして、手を出してはならぬものである。

◎39：狐変人妻形来家語第三十九：きつねひとのめのかたちとへんじていへにきたること
◎38 同様狐が化け損じた話。ある夕方、京の雑色男（雑役に従事する下賤な男）の家に前後して妻が現れ、当惑した男が糾明の末、先立って入来した妻を狐と判じて捕らえておいたところ、やがて悪臭ふんぷんたる小便をひっかけ、正体を現して遁走した話。狐が化けの皮がはがれたとみるや、悪臭ふんぷんたる小便をひっかけ遁走するのは、鼬の最後っ屁にも似た常套手段のよだ。
◎思うにこの男は思慮のない男である。二人の妻を捕らえ縛り付けておけばよかった。
されば、こういうことがあった場合は、心を鎮めよくよく思いめぐらすべきである。すんでのところで本当の妻を殺さずにすんだのでまあよかったと人々は言いあった。

◎40：狐詫人被取玉乞返報恩語第四十：きつねひとにつきてとられしたまをこいかへしおんをほうずること
◎狐憑きの女から狐秘蔵の白玉を取り上げた若侍が、狐の懇願に応じて返してやると、狐は恩義に感じて日ごろ侍の身辺を警護し、侍が広隆寺の参詣の帰途、狐の道案内で盗賊の難を逃れ得た話。ともすれば人を化かし、毒害を流す狐が、と文末に評されることは、一見矛盾するかにみえながら、別の視座からの評語として興味がひかれる。
◎最後の評：思うに、かような獣は、かくも恩を知り、嘘はつかぬものである。
さればもしも何かの機会があって、助けてやれそうなときは、かような獣はかならず助けてやるべきである。ところが人間は思慮があり、因果を知るはずのものでありながら、獣よりはかえって恩を知らず、不実な心もあるのだ、とこう語り伝えているということだ。

◎41：高陽川狐変女乗馬尻語第四十一：かうやがはのきつねをむなにへんじてむまのしりへにのること
◎女の子に化けて高陽川（紙屋川：京都北西部を流れ桂川にそそぐ。紙屋院の紙すき場があった）のほとりに出没し、通行人の馬に乗せてもらっては途中で逃げだす狐がいた。それが滝口の本所で話題になった時、捕縛方を買って出た滝口の武士が、最初の失敗に懲りて、二度目は警戒を厳かにし、見事滝口の本所まで捕らえてきて、散々いたぶった末逃がしてやった話。後日評として、それから十余日後、滝口の武士が例の狐にあって、馬に乗るように進めたところ、狐はもう懲り懲りと答えて消え失せたことが付されている。
◎人を化かそうとしてまったくひどいめを見た狐である。この出来事は最近の事らしい。珍しい話なので語り伝えている。思うに狐が人の姿に化けるのは昔からよくあることで、格別めずらしいことではない。だが、これは化かし方が格別にうまく、鳥部野まで連れて行ったのだ。
狐はその時の人間の心の持ちようで、やりかたを替えるのではなかろうか。

077　薪能　　120823

◎かんちゃんから、「薪能に行きませんか」というお誘いを受け、「行く」と二つ返事で快諾した。二つ返事：いつも使う語句ながらなんだか不安になって調べると：「はい　はい」とこころよく快諾するからだって・・。話はとんだが、「それじゃ　阪急淡路駅のホームで会いましょう　時間は　おって・・」という話が決まっていたが、80 歳を超えたかんちゃん、「体調が思わしくないので　チケットを 2 枚送る」と連絡が来た。さあどうしようと思案をしていたが、我が家の恒例“墓参り”毎年盆と暮れに行くがそれを兼ねてカミさんに聞くと、同道するというので決めた。

◎盆と暮れの墓参り。カミさんの家の墓は、布施の長瀬に大きな墓だらけの場所がある。夏はぼんぼりを点し暗い時に行くとなかなか風情のある雰囲気、「盆踊りは　こういう設定場所が発祥かな」と思わせる賑やかさである。元村人がみなさんで管理する焼き場を併設した大きな墓地、昔は屋台も出ていたような気がする。管理費が 2000 円とぼんぼり管理代が 3000 円である。薪能が生國魂神社で 5 時半から始まるので、3 時に家を出ればいいかと予定していた。今日からお盆が始まり全行的に帰省ラッシュの日だと聞き、「ならば大阪市内は空いているだろう」と高をくくっていたら、だらだら道が混んで墓に着いたのは 4 時をだいぶ回っていた。すんなり駐車場に車を止め、墓に水をかけ、持参の花を飾り、線香を点した。なんと、ぼんぼりを配線するあんちゃんが 4 時までで帰ってしまい、泣く泣くぼんぼりは車に積まれた。「また年末にね」と次の墓に向かった。出るときには駐車待ちの車が 5.6 台並んでいた、ラッキーであった。

◎次は岡村家の墓。生國魂神社と聞き、「いつも　墓参りする　場所じゃないの」その近所の寺の中に岡村家の墓はある。元来、岡村家は本籍が山口県にあり、熊毛郡平生町の寺の中に墓がある。明治維新が終わり一旗揚げようと当主がアメリカに行き、「後は頼むぞ」と元の家来に言い渡したとか。その家来の子どもさんから、「殿様よりお預かりした・・」というような封書があったようなことを覚えている。今は山口県の墓は、おやじの言い渡しで棄てている。棄てているとはいえ、おやじははっきり山口県の寺と絶縁したのではないらしく、なんじゃかじゃと言ってきていたが、最近は無くなった。これまた話はとんだが、岡村家の墓に水をかけ、花をいけ、線香を点して、「また冬になあ」と別れを告げた。

◎駐車場は墓のまわりと探したが、1500 円タイムの駐車場が満杯で、大阪市の駐車場に止めた、ここも 1400 円だった。5：15 分に墓参りが終わり、歩いてたった 3 分のところである生國魂神社の門をくぐった。冬はオレ、頻尿癖があり墓参りのおりには生國魂神社のトイレを借りているので勝手知ったるお宮さんである。

◎社殿の前に舞台が造ってあり、パイプ椅子はほとんど人で埋まっている。千人ぐらいの観客がおられるかな、まだ 6 時にならない時間帯はまだ夕日が沈みきってない明るさ、日差しはないがまだまだ暑い。演目は、能の敦盛、狂言の長光、能の井筒、その合間に踊りがある。

◎敦盛は、半能となっている。時間短縮のためはょっているらしい。一ノ谷の合戦で打ち取られた平敦盛の霊が打ち取った相手の熊谷直実（法師）の前に現れ合戦の有様を語り舞い、弔いを乞う。
じんかん五十年、下天内を比ぶれば、夢幻のごとくなり。ひとたび生をうけ、滅せぬもののあるべきか。

◎狂言：長光（名刀）：名刀の持ち主、あつかましい刀泥棒、仲裁の目題の 3 人。にやにや見てしまった。

◎少し暗くなってきて火が入った、焚火が燃え上がる、いよいよいい雰囲気だ。二十歳の頃に奈良の春日の御祀り、夜中の暗い中に焚火が燃え上がっていたのを思いだす。
帰らぬ夫の業平を、女の霊が待ち続け舞う。伊勢物語の「筒井筒」を軸とし、在原業平と紀有常の娘の恋、待つ女である井筒の女が、在原の形見の着物を着て舞う。

◎暗くなり火が燃え時が流れる。

078　古事記　150723
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
海を渡るオキナガタラシヒメ：戦う女帝
◎ヤマトタケルが亡くなって、ワカタラシヒコの後を継いで大君になったのは、その御子ではなくヤマトタケルの御子タラシナカツヒコじゃった。前の大君の御子ではないものが後を継いで大君のなったのはこれが初めてである。後の代になるとめずらしいことではないのだがのう。
タラシナカツヒコの大君は、穴戸の豊浦の宮と筑紫の詞志比（かしい）の宮とに座して、天の下を治めたもうた。
◎穴戸の豊浦の宮：山口県下関市。筑紫の詞志比（かしい）の宮：福岡市東区。ともに倭から遠い。以下の伝承によれば、熊襲の国を討つための、遠征さきの仮宮である。
◎タラシナカツヒコの大后オキナガタラシは、大君と共に筑紫に出向いておった時にの、神を依り憑かせたのじゃ。皇后の役割として、神懸かりする能力を求められる。シャーマンには魂を異界に飛ばす脱魂型と、神を肉体の中に入れる憑霊型がある。
脱魂：ある人物の霊魂が神体を離脱すること。病気、失神、夢などが離脱とみなされ、死は永久離脱とされる。
憑依（ひょうい）：霊などが乗り移ること。憑霊、神懸かり、狐憑き・・。

◎大君が、熊襲の国を討とうとしていた折での、大君が琴を弾き神のお言葉を請うた時じゃった。
◎太后に神が依り憑いてきての、お告げの言葉がその口を借りて出てきた。
◎「西の方に国がある。金や銀（こがねやしろがね）をはじめ、目の輝くばかりの種々（くさぐさ）のめずらしい宝が、あふれるほどにその国にはある。われは、今その国をそなたに寄せ与えようぞ」
◎大君「西の方を見ましたが、国土が見えず、大きな海が広がるばかり・・」こともあろうに、偽りをなす神じゃと思うて、琴を弾くのをやめてしまった。
◎神がひどく怒ったので、大君はなまなま（いい加減、中途半端、渋々）琴を弾きはじめたが、いくらも経たないうちに琴の音が消え、大君はこと切れた。

◎殯（もがり）の場面：
皆は驚き畏れての、大君の亡骸を殯の宮に納めて、さらに、穢れを祓うために、すべての国々から貢物の大きな幣（ぬさ：白いひらひら紙は御幣）を取り集めての、毛物の皮を生きたまま剥いだり、定めとは逆さに剥いだりした者、田の畔を壊したり、溝を埋めたりした者、糞を神を祀る殿に撒き散らした者、親と子で交わった者、馬と交わった者、牛と交わった者、鶏と交わったり、犬と交わったりした者、そうした罪を犯した者どもの、罪という罪をあれこれ探し求めてきての、それらの罪を祓うため国を挙げて大祓をしたうえで、ふたたび、大臣（おおおみ）が、神のお告げを請うた。

◎オキナガタラシヒメに依り憑いた神の教えは、前回と同じでさらに加えて、
「およそこの国は、そなたの腹の中に座ます御子が総べたもう国であるぞ」
「腹に座ます御子は、いずれの子で・・」
「男の子である」
「かくのごとく教えたもうた神はいずれの神にいますや・・」
「これは　アマテラス大神の御心である」
「今、まことにその国を求めたいと思うならば、天つ神、国つ神、山つ神、河や海の諸々の神とに、ことごとく幣帛（みてぐち）を捧げ祭り、わが御魂を船の上に置き祀りて、真木の灰をヒサゴの中に入れ、また、箸と平たい皿とを山のごとく作り備え、それらをみな、大海に散らし浮かべながら渡り行くがよいぞ」

079　北小松　　200723

◎8：30 北小松駅を出発、登山口まで歩いているが、いやな暑さだ、まわりの空気が全部熱い、そんな中を舗装道路を進んでいる。後ろから車が上がっていく、夏休みの今、子供らを乗せて元気村に行くのかな。

◎面白いことがあった、今朝はおおいにチョンボをした。家を出て自転車で JR 茨木駅まで走っていた、「45 分の電車　まだ 10 分ある　楽勝だ」「え　ちょっと待てよ　一時間早いんじゃないの・・」なんと 1 時間間違えている。昨夜北小松に行くのに検索して、いつもの 7 時 45 分が最適だねと決めた。寝る前に目覚ましをセットした、「ええ～と　」と時計をいらいながら、6 時になっている、30 分では足らないのでもう 15 分ほど余裕を持たせてと、5：45 分にセットをしてしまった。ほんとうは 6：45 分が正解なんだ。そのカン違いに気づいたのが自転車に乗って消防署の前あたりだった。もう引き返すわけにもいかず、そのままホームに立った。

◎京都行の普通電車に乗った。車内アナウンスで、次の快速電車が遅れ、この電車が京都に先に着くという。湖西線の北小松に行く電車はないかなとスマホで検索した。パソコンならチョイチョイで簡単にできるんだがと思いながら、「YAHOO の路線で　できるのでは・・」「えいはら駅　とは　北小松の前か先か・・」「次は　時刻表」時間があるのであっちこっちと引っ張り出し、今乗っている電車が京都に着いた 4 分後に湖西線の永原行き（ながはら：マキノの近所のようだ）に乗れば、いつもの 8：45 分より 30 分早く着くことがわかった。スマホは使いこなせれば便利なものである。

◎今日はなかなかにしんどい、息があがる、これは熱さのせいだね。一週間前ぐらいからだらだら停滞気味の台風が来ていた、こいつのおかげで雨模様が続き、猛烈極暑が 5 度ほど下がった。夜も布団が欲しいなと思う日が続いたが、それが去ってまたまた極暑がぶり返してきた。前回の蝶ヶ岳の時も 30 分ピッチで上がったが、今日の 30 分はなかなか時間が過ぎていかない、何度も時計を見るが 5 分ぐらいしか経っていない。「登れるか登れないなんて・・」GPS の高度を見ると、500M が 700M に、「なんだか涼しいのでは」夏の山も高度を稼げば涼しい、「こらあ　行けるぜ」どっこいしょと登っていった。長袖のシャツは汗でボタボタである。

◎8 時頃、電車が滋賀県に入るとなんだか薄暗い、車窓から見える比良山系が全部雲の中、「ええええ　大丈夫かな」と思っていた。昨日 YAHOO 天気予報では晴れマーク、山の天気では、9 時から 3 時まで晴れマークだった。登り始めて半分ぐらい来たが、空は白い雲がモコモコあるが青空も見える、降らないでねと祈るばかり。

◎今 830M の標高らしい、いささか涼しい。先日の台風が葉や枝をまき散らしたのか、登山道もにぎやかだ。TV で“山の地図読み”の講習をやっていた。オレはこのあたりは無知だ、等高線ぐらいしか読めない。尾根だの谷だのを見極め、現在地がわかることが大事だね。ま、そのテン、GPS はありがたい。

◎12：30 ヤケオ山に着いた。腹も減っている、ここで飯だ。空はどんより前の山々に雲がかかりだした、いやだねえ。目の前の小枝にシオカラトンボがじっと止まっている。あれれ、飛んだと思ったらまた帰ってきた、何をしているのかね。その向こうにトンビらしき鳥が滑空していった。帰る時も休んでいると、中型の黒っぽい鳥が枝々を飛び回っていた、にぎやか君はだれだろうね。トカゲもたくさん見た、しっぽの方が青や紫のメタリックな色、ササッと走り回りじっくり観察できないが、綺麗なやつである。

◎このコースは 2 か月前に登っている。今は緑の最盛期、見えるはずだがと、きょろきょろするが生い茂った枝や葉で視界が遮られる。道を間違えたかと思うほどに緑みどりだ。

◎1 時に釈迦に到着、自撮りのオレを写真を撮って早速下ろう、暗くなってきた、今にも来そうだと歩いていると、ポツリぽつり、まだカッパはいらないか、しばらく歩き、まだ大丈夫か、樹林帯の中なので雨音はするが身体は濡れてこない。空は明るいしまだかなと歩いているがいよいよ降ってきた。「ええい　久しぶりの　雨装束だ」雨具の上下とザックにカバーをかけた。

◎すぐに雨が収まり、「これなら　着ることがなかったね」ズボンを脱ぐときに足が攣るイテテである。腹が減りパンを 1 個、2 リッターの水も少なくなってきたがあと少しで流れがある、その向こうに湧水がある。

◎下るにつれ、どんドン蒸し暑い。昔のケーブル駅のあたりに湧水が出ている、冷たい美味い。タオルで体を拭きシャツを着替え、30 分バスを待って、帰途についた。車内でビールを飲んでいる人、あれは美味そうだ。

080　今昔物語　210723
平定文借仮本院侍従語第一：たひらのさだふみほんいんのじじゅうをけさうすること
会平定文女出家語第二：たひらのさだふみにあふをむなしゅっけすること

◎この二つの話は、平定文こと平中の好色譚（たん：物語をかたる）である。
◎第一は本院侍従に執拗に言い寄ったが、そのたびごとに侍従の手管に翻弄され、思いが募るままにフェチシズム的醜態を演じて焦がれ死んだ。宇治拾遺物語にも同話があるが内容が多少違うらしい。
◎さんざん翻弄された平中は、「なんとかして、この人がいやになるようなことを聞きだして、きらいになりたいものだ」ふと思いついた。「こんなに素晴らしく美しくても　便器に仕込まれたものは我々と同じに違いない。それを引っ掻き回したら嫌気がさすだろう」平中は時を得て女童から薄物に包まれた便器を奪った。
便器には金漆が塗ってある、美しさにしばらく見とれていた。蓋を開けると丁子（ちょうじ：グローブ：漢方薬）の香がした。中には淡黄色の水に、うんこ（本文にはこの単語、表現はない）らしきものがあるが、すばらしく香ばしい黒方（くろぼう：和風の香：有名だね）の香りがする。
平中、「尿に似せたものは丁子を煮た汁。うんこは野老（ところ：やまいも）と練り物を甘蔗（あまずら）で調合したもの」
相手が便器を手に入れ見るだろうと思うものか？・・、よくまあこんなことまで細工をするとは・・、「何から何までじつによく心の働く人だ。この世の人とも思われない、なんとしてでもこの人を物にせずのはおられない」恋焦がれているうちに病気になってしまい、悩み続けた末に死んでしまった。
甘蔗（あまずら：平安時代の甘味料：上品なあまさ：蔗で作る：これを再現したサイトがいくつかある）
◎筆者談：男も女もなんと罪深き事だ、女にはやたら夢中になるものではない。
◎オレ談：いかに、いい塗りの便器、いい香りがするとはいえ、それを口にするとは、オレはいやだねえ。

◎第二は、市に出て女あさりをしていた平中が、武蔵の守某の娘を口説き落とし一夜の契りを結んだが、帰宅後宇多天皇のお召で、平中は大堰川御幸に随従させられ、5.6 日も、女に手紙を出せなかった。女は手紙が来ないことに、嘆きと恥ずかしさのあまり、人知れず黒髪を切って尼になったという話。女も自尊心が強いゆえに受けた打撃も大きかった。平中も公務出張で都合がつかなかったと言え、思いやりの欠如がある。本文でも最後に、こんなことになったのは、男に思いやりがなかったためである。どんな事情があるにせよ、「こういう事情ができて・・」といってやることはたやすいことなのに・・。
その当時は、一夜の契りを結び男は自分の家に帰っていく。そのあとで契った女に手紙を書くのが常識の風習だったようだ。女の使用人共が、「たいそう浮気者だという評判のお方にうかうか肌身をお許しなさったりして　お手紙さえおよこしにならないとは」女は自ら思っていることを他人が言ったのでいっそう辛く恥ずかしかった。
◎後朝（きぬぎぬ：衣衣：恋人たちは夜の間、ひとつの衣にくるまり合い混ざりあいますが　翌朝は各々の衣を着て身を繕い帰宅する）
平安時代つかの間の逢瀬を終えると貴族の男は家に帰り着く前に契った女へ手紙を送るのが礼儀だった。もし送らなかったら、「もう逢わない」という極めて失礼な意思表示でした。
◎後朝の文いろいろ
藤原義孝　　君がため　惜しからざし命さえ　長くもがなと　思いけるかな
あなたと結ばれ幸せだった。あなたのためなら死んでもいい。長く生き、ずっと一緒にいたい。

待賢門院堀川（女性の返歌）　　ながからむ　心も知らず黒髪の　みだれて今朝は　ものをこそ思へ
愛を誓ったあなた言葉は本当かしら、ひとりになると、この黒髪のように心乱れ悩んでしまうわ。

081　古事記　240723
三浦祐之著＜口語訳：古事記＞
◎前回の続き、神話とはいえ朝鮮半島にとってはまこと失礼な話であるが、神話として聞いて欲しい。
◎オキナガタラシヒメに依り憑いた神の教えは、前回と同じでさらに加えて、
「およそこの国は、そなたの腹の中に座ます御子が総べたもう国であるぞ」
「腹に座ます御子は、いずれの子で・・」
「男の子である」
「これは　アマテラス大神の御心である　またわれは　ソコツツノヲ・ナカツツノヲ、ウハツツノヲこの三柱の大伸であるぞ」
「今、まことにその国を求めたいと思うならば、天つ神、国つ神、山つ神、河や海の諸々の神とに、ことごとく幣帛（みてぐち）を捧げ祭り、わが御魂を船の上に置き祀りて、真木の灰をヒサゴの中に入れ、また、箸と平たい皿とを山のごとく作り備え、それらをみな、大海に散らし浮かべながら渡り行くがよいぞ」

◎そこで、何から何まで三柱の大神の教えたとおりにしての、軍を整え船を並べて、大海を渡り出でますと、海原の魚は、大きいもの小さいものこぞって、みな船の底と腹とに集まり、その船を背負うて、大海を渡っていったのじゃ。しかも、追い風が強く吹き起っての、船は波のままに運ばれていったのよ。それで、その船の勢いのままに、波は津波のごとくに新羅の国に押し寄せ上がっての、その国の半ばにまで至ったのじゃった。

◎それを見た新羅の国王（くにぎみ）は畏れ戦いて（おののいて）しもうての、「今より後は、倭の国の大君の仰せのままに、馬飼となり、年ごとに船を並べ、船の腹を乾かすことなく、船の棹や楫（さおやかじ）を乾かすこともなく、天と土とがある限り、常に永久に（とこにとわに）お仕えいたします」というたのじゃった。
◎新羅：4～7 世紀にかけて朝鮮半島には新羅、高句麗、百済の三国があった。新羅は唐と結んで、高句麗、百済を滅ぼし 10 世紀前半まで続く。古事記では朝鮮半島を代表する国として登場。
朝鮮半島の人々にとって、オキナガタラシヒメは今も憎悪の対象となる、侵略者のシンボルである。歴史学的には不明。

◎さて、その新羅の国から帰り着く前のことじゃ、大后の腹に宿った御子が生まれそうになってしもうたのじゃ。石を拾うと裳（も）の腰のあたりに巻きつけ筑紫の国まで渡りもどり、そこで、腹の中の御子は生まれたのじゃった。（妊婦が腰に石を巻き付けると出産を遅らせるという俗信があったのかも）

◎オキナガタラシヒメが筑紫から倭に帰る時に、天皇の没後に、異腹の皇子たちによる皇位継承の争いがおこる。記紀では、皇位継承の争いはしばしばみられる。カゴサカとオシクマの兄弟、血筋の申し分のない御子が立ち上がった。
カゴサカとオシクマの二人は、オキナガタラシヒメに異腹（ことはら）の御子が生まれたと聞き、待ち受けて殺そうとした。二人はウケヒ狩りをして、兄のカゴサカが死んでしまった。弟のオシクマは軍を興して太后と御子を待ち受け、西から上ってきた太后の船に近づき、御子の乗っていない空の船に攻め込んでいった。そこで太后は御子と共に、隠しておいた軍人（いくさびと）を戦わせたのじゃ。

◎オキナガタラシヒメ側は、「オキナガタラシヒメは　すでに　亡くなった」という計りごとをめぐらした。
オキナガタラシヒメ側は、弓の弦を外し帰るふりをした。
それを見たオシクマ側は、すっかり騙され、こちらも弓の弦を外し、武器（つわもの）を収めたのじゃ。
オキナガタラシヒメ側は、隠しておいた弓の弦を取り出し敵を追い撃った。

082　かるた　270823

◎一週間ぐらい前から夜の暗闇から虫の声が聞こえる。昔はあれが鈴虫で、これがコオロギで、なんてことを知っていたはずだが、今はどれがなにやらわからないが、小さいか細い声がチリチリひょろひょろ聞こえてくる。いいもんだね。

◎一か月前ぐらいから、かるたの絵を頼まれ描いている。その時点で、無理だと思うけど 8 月中に絵ができあがればという話だったが、8 月末の今時点で 30 枚ぐらいしかできていない。「8 月中は　ま　無理だと思うが」問い話で進んできたが、まだまだ時間があると、絵のことを忘れているわけじゃないだろうけど、句が揃わず全部決まったのが 8 月中旬ぐらいだったと思う。1 週間に 5 枚ぐらいのペースで進めている。かるたは、「いろはに」の 50 個の音らしいが、「を・ゑ・ん」を抜くらしい。さて何枚になるのか・・。

◎先日、面白い動画を送ってもらった。1936 年昭和 11 年 10 月 7 日、北野中学第四学年の生徒全員が、福知山の長田野演習場で軍事教練をしているビデオだ。「へええ　そんな昔に　ビデオカメラを担いで　演習風景をとっているとは・・」そう驚いたが、「撮ったのは　鴻池さん」と聞き、鴻池の御曹司ならそんな贅沢なこともありかなと思った。

◎日清日露の戦争が終わり職業軍人の就職先ということで全国の中学校以上の学校に現役将校が配置された。大正 14 年陸軍現役将校学校配属令というそうだ。ネットで見ると、配属将校は、兵隊になるための初期訓練：軍事教練を行い、その権限は校長と同等の絶大なもので、少しでも生徒がたるんでいると、鶴の一声で授業が吹っ飛び運動場で行進の練習が始まった。他のネットでは、当時の日本は徴兵制度があり若い先生方は召集令が届き、学生全員に見送られて出征していったという記事が見える。

◎北野中学の学生たちを見ると帽子は学生帽に白い布が巻いてある。服も軍服のようで折れ曲がった衿が付いている。足には白いゲートルが巻かれ、ほんま物の鉄砲を担いで行進している。子どもたちに悲壮感はなくふざけた場面や笑顔も見える、機関銃の小さいものも見える。野原をかけめぐり盛り上がった土の前で鉄砲を構え撃っている。またまた走り出し、今度は腹ばいになって鉄砲を構え撃っている。15.6 歳の少年が走り跳び鉄砲を撃っている。

◎「へええ　こんなことがあったのか　中学生がこんなことをしていたのか」このビデオを見て驚いた。当時軍事教練があり戦争が目の前にちらついていたのは知っていたが、現在、今の世の中、こういうことは国民の目に触れないようにしてきたのかな。今では普通には考えられないが、「お国を守る　お国のためなら死ねる」という考え方が常識だったのかもしれないね。

◎もう一つの驚きは、“殉難の碑”のことだ。北野中学のタイルの壁の一部が、ぼこぼこ凹と抉られた所がある。「あれは飛行機の鉄砲の弾のあとだ」と聞かされていた。コンクリートの壁がバケツ一個ぐらいに抉られるのだからその威力はたいしたもので、あの一発が当たれば像でも死ぬぞと想像できる。殉難の碑がその前にあり、校舎の壁が傷つけられた記念の碑かなぐらいに思っていた。

◎1945 年 6 月 15 日の空襲で、十三は焼け野原になったらしい。校舎は幸い残ったがグラウンドは火の海だったと書かれている。「学校を守る学生」「なんで子供が学校を守るの」と不思議に思ったが、当時 13 歳の中学生が学校を守るために学校に居残り、そこにたくさんの爆弾が落とされた。ひとりは鉄兜をかぶった頭に破片が直撃して亡くなった。もう一人も足に被弾して亡くなった。学校を守るという当番で居残っていた二人が無くなったらしい。その事を殉難の碑としているらしい。

◎13 歳の少年が、「今日は当番で学校に行く　美味しいものがもらえるので　お土産に持って帰るからね」「そんなのいらないよ　せっかくいただくのだから　食べてきなさい」なんて会話があったらしいことをお母さんの手記で残っている。当時若手の先生たちは徴兵で戦場に行っていたので、子どもたちに、学校を守るという仕事が回ってきたらしい。